



裾野の広い山の麓の比較的のどかな街、竹本町（たけもとちょう）。

その端っこにあるのが竹本〇学校だ。

校舎の敷地面積の約10倍はある大きな池に隣接している。

現在、竹本〇学校の3年3組を中心に話題になっているのは、

”無人島”だ。

近頃はみんな異性に興味津々で、暇があればやれ彼氏彼女だのやれ恋愛だのキスだのセックスだのクラス内は真新しい性の話題でひっきりなしだなのだが、“無人島”はそのことに深い関係がある。

”無人島で初体験をする”

それが今、このクラスでブームになっているのだ。

自給自足の初体験??

違う。

キリモミ式の火起こしの初体験??

違う。

そのままストレートに。

”セックス”の初体験のことだ。

この無人島で生まれたままの姿に立ち返り、セックスして大人になって、その後もエッチなことをたっぷりして野生に帰ってしまおうという自由奔放な体験が今このクラスでブームなのだ。

「でさあ、いつ行くかだよなあ！」

「夏がいいと思うんだけどな。青い海に白い砂浜、そこでやるのきっと最高だぜえ！！」

「だなあ！俺とはあんまりしゃべんないんだけど、近所に住んでるヨシナリも最近行ったって噂聞いたよ、やっぱ開放的だったらしいよ」

「ウワァー！また先越されたよお！！」

その“無人島”だが、3組で一番のお金持ちで体重120キロの巨漢、ツトムの別荘の近くにある。

ちなみにツトムはもっぱら食べることに興味があるだけで異性には全く興味なし。当然ながらその関連話題にもあっけらかんとしている。しかし人が良く、自分の別荘に友人たちを連れていくのがかねてよりずっと好きだった。

一番初めのきっかけは、そんなツトムが当時からクラス内でも背が高くて人一倍大人びていたサトシと別荘の近くにある無人島の話で盛り上がり、一緒に行ってみようということになったことだ。

3年の春、少し暖かくなり始めた5月上旬のことだった。サトシは隣のクラスの幼馴染であるユウハも一緒に連れていくことにした。つまり最初の無人島メンバーは誘導役のツトムとサトシ、ユウハの3人だ。

そして……。

必要最低限の物と一食分の食料だけを小さなリュックに詰め込み、実に無計画、無防備で行ったその無人島で……。

まだ太陽がキラキラと青い空の真上に照り付けている浜辺で……。

うららかな気候に気持ちよくなり、ツトムが居眠りをしていたその間に……。

サトシとユウハはちゃっかり”大人”になったのだ。

ほぼその出来事と時を同じくして、3組では“カップルブーム”が到来した。

その頃付き合い出したのは無人島でのセックスをきっかけに恋人になったサトシとユウハのカップルだけではない。

新しい3年の春が来て、みんな次々と恋人を作り始めたのだ。

カップルブーム。

恋人ブーム。恋愛ブーム。はたまたエッチブーム！！

意味合いは同じ。どんな言葉を使っても一緒だ。

なぜなら付き合い出してエッチを済ませない男女などいないからだ。

みんな“夢中”なのだ。

そして、他のクラスと比べても特に団結力が強く、仲が良くいつもほのぼのとした3組では、一段とそのブームの色合いが濃かった。

そしてついに夏がやってきた。

次第にエッチをしていない生徒は”おいてけぼり”の雰囲気さえ漂い出す……。

取り残されまいと、みんなが”エッチなコト”に競争！！

そんな空気が3組を中心として、学年全体を包み込み始めたのだ。

3組に、ちょっぴり内気で大人しいアキトという男子生徒がいた。

部活はテニス部に所属している。

運動部ではあるが少し貧弱なところがあって、体調が悪い日はわずか“3時間”の部活を休むこともある。だけど友人はそれなりにいて、内気ではあるが暗くはない、そんな生徒だ。

そんな彼はクラス内の初体験ブームに背中を押されるように、内気な彼の心の中から目いっぱい勇気を振り絞り幼馴染のアリサに告白した！！

彼のどこから一体そんな言葉が出てきたのかと思うくらい大胆でストレートな告白だった。

「アリサ、俺とき・・・一緒に無人島へ行って、エッチしようよお！！！」

もう無我夢中！！

ドキドキしすぎて、言ったその瞬間にその言葉が昇天して青空に打ち上げ花火のように上ってそのまま消えていく、アキトはそんな感覚だった。

だけどそんな真っ直ぐなアキトの想いがアリサに通じ・・・。

「うんっ！！あたしも行きたいって思ってたんだあ！」

頬を赤らめ、嬉しさにちょっぴり涙ぐみながら承諾したのだ！！

無人島へのルートは、アキトもアリサも他のクラスメイト達の話で以前から聞いていたし、それに一つ電車を乗り継げば、2時間半もかからずに海まで到着するという具合にシンプルなものだったのでもう十分分かっていて。

海に到着してからは、ツトムの別荘のガレージ内に置かれたボードを借りて島へ向かうという流れだ。

そして当日・・・。

ブウウー————ンツツツ！！！！

水しぶきを上げ、絶え間ない波間を無視して突き進むボート。

予定通り待ち合わせし、一緒に電車を乗り継ぎ、浜辺でツトムの別荘へ向かう。計画通りの流れだった。

ツトムはツアーガイドのように無人島へ向かうカップルを誘導することもあったが、アキトとアリサはこの日二人きり。

ツトムと一緒に行くことを提案したが、二人きりが良かったアキトとアリサが断った形だ。

2人は無人島に到着した。

「だけどき・・・みんなこんなところまで来てたんだね」

どこまでも途切れずに広がる地平線を眺めながらアリサが言った。陸地も見えない、四方八方ひたすら海。

「だね。なんかこんなこと経験ないからさ、すごくドキドキするよお」

人工物は何もない。ひたすら自然がどこまでも広がっている。

「島だったらパパやママと小さい頃行ったことあるけど、無人島、だもんね」

ありきたりな会話をする2人。

2人の内心は、もうセックスのことで飽和状態だ。

もはや楽しい会話など上の空。

それが事実だった。

ザッパァァァーッ！！！！

際限なく打ち寄せる波が大きな音を立てる。白い砂浜は削られてほんの少しずつ形を変えていく。

天気予報で“快晴”であることは確認済みだったが、運よく予報が外れることなく空には青々としたもう一つの海が広がっている。

「アリサ・・・」

楽しそうだったサトシが少し真剣な顔つきになってアリサを見つめる。

「う、うん・・・」

ぎこちない2人。

どぎまぎして2人とも固いけれど、“大人の世界”については何もかも知らない。だから当然のことだった。

心の中は激しく揺れ動いている。

興奮で胸が張り裂けそうだった。

「じゃ、じゃあさ・・・」

「んっ・・・う、うん・・・」

ビルもなければ道路もない。

標識も壁紙も、たばこの吸い殻一つない。
普段の街中の景色とはあまりに違いすぎるこの無人島の中。

照り付ける太陽に、二人の中にほんのちょっとだけ大胆になる勇気が湧いた。

「あ、あのさ！！じゃあ暑いから服、脱ごうぜ！！」

「そ、そうだね。暑いもんね！！！」

アリサの表情が緩む。

肩もずいぶんと柔らかくなった。

そしてサトシがその隙を見計らい……。

「ど、どうせならさっ！、そ、その……そのさ……脱いじゃおうぜ！！
全部全部！！」

サトシの元気に、さらにアリサの表情がさらに温和に変わる。

いつも女友達のクラスメイトと、洋服の話やシャンプーの話をしているときの
ように。

そしてそれとほぼ同時に、顔が桃色に染まった。

「いいかもっ！脱いじゃおっか！！いっそ……ねっ！！」

あまり難しくならなくていい。

青い透き通った空が、そう語っているようで。

” クラスのみんなはもうここでエッチを済ましちゃっているんだ”

“自分たちも今からここで……”

二人ともその事実はすでに分かっている。

分かっているから、ここへ来たのだ。

2人は服を脱いでいく。

高い気温。

真夏の昼間の二人の服装は、無人島へ行くのにはあまりに無防備、無頓着。

サトシは短パンとTシャツ。まるで〇学生の少年のような恰好。
アリサもサトシのわずか半分の丈の短パンにノースリーブのシャツ、そして薄いピンク色のブラウスを羽織っているだけ。

ブラウスとシャツを脱いでアリサがブラジャーのみの状態になった。

上半身にブラジャーだけ。まだ短パンは穿いている。

一方で少しだけ勇み足のサトシは短パンを脱ぎ、モッコリ盛り上がったブリーフパンツを露わにしていた。

幼馴染の女の子のブラジャー姿。
おっぱいの形も大きさもほとんどわかる。

幼馴染の男の子のパンツ姿。
成長したペニスの大きさが、密着したブリーフで浮き彫り状態！！

凄くエッチな気分になる2人。

「なっ、なんか・・・こ、こんなんでもいいんだよね??」

不安そうなトーンでアキトに上目づかいで尋ねるアリサだったが、不安は見せかけ。たまらなく幸福な内心が隠しきれていない。

「いいよいいよ！！いいんだよ！へへっ！なんかスゲー開放的じゃん！！」

アキトの”強気”がアリサのか弱い声の上に乗る。

「へへっ！だよね！」

ニコッと小悪魔っぽい微笑みを浮かべるアリサ。

全ては若さのエネルギー。

そしてここは・・・・・・・・・・。

何にも遮られることのない常夏の無人島！！

「ハハハッ！なんか裸！！俺ら裸じゃん！！」

「ほんとだね！なんかすごおい！！」

体験版はここまでです